

定例セミナー講演要旨



知的で開放的な広場

—宝仙学園中学・高等学校「理数インター」の これからの10年

宝仙学園中学・高等学校 校長 富士晴英



はじめに

私が初めてお会いする100名くらいの参加者にお話しさせていただくのは、本校の中学受験生の保護者対象の説明会で、たまにある程度です。みなさんのように、私学経営でキャリア豊かな方々を前にお話するのは、今回が初めてです。

私のスピーチをきっかけに、双方向性のある交流があることを希望しています。よろしければ、私の話が終わった後に、ご質問ください。私も、自分の体験にとらわれず、もっと成長したいと思っていますので。その前提として、率直にスピーチさせていただきます。

1. 宝仙学園とは

本校は、新宿駅から地下鉄に乗ってから、正門まで10分のアクセスです。幼稚園・小学校・中学校・高等学校・大学からなる総合学園です。

理事長は、隣接する宝仙寺の住職で、宝仙寺は、真言宗の寺院です。

総合学園とはいえ、園児・児童・生徒・学生合わせて現在2,200人弱です。このうち、中学・高等学校は、現在およそ半分強という状況です。

中学・高等学校は、1928（昭和3）年に創設され、女子校として、長い伝統がありました。

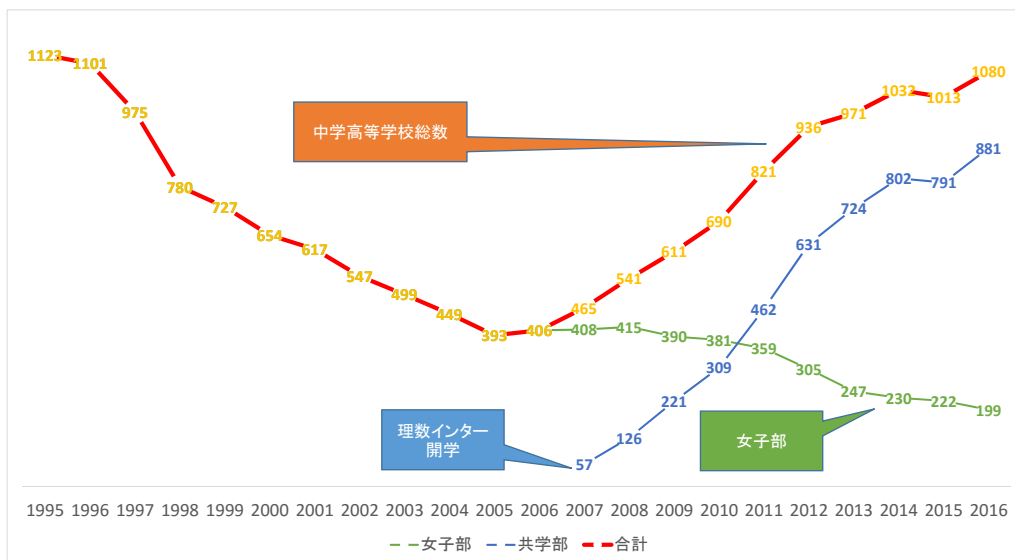
私は、1990（平成2）年に、中学・高等学校に教諭として入職しました。

入職数年後には、高等学校で1学年9クラスに達した学年があったことを、記憶しています。ただし、中学校は、3クラスに達した記憶はありません。

2. 女子校に共学部を創る

表1は、1995（平成7）年以來の、中学・高等学校の生徒数の推移を示すグラフです。

（表1）理数インター開設まで



1,100名以上の往時から10年を経た2005年には、400名を割る生徒数に落ちてしまいました。私が中学・高等学校の将来像に対して、経営陣から意見を求められたのは、それからのことだったと思います。

首都圏では、趨勢が振るわなくなってしまった女子校が、当時、共学校として再スタートすることが珍しくありませんでした。

宝仙学園は、どうするのか。という話し合いです。

「単に共学化するだけでは、将来に対する見通しが十分ではない。」というのが、私を含む、当時の判断でした。

私の考えは、「単に共学化するという措置は、覚悟が足りない。従来の女子校にも、かけがえない良さはあるし、一方、それとはまったく別に共学の進学校を創るといふ潔さがないと、激戦の東京の中学受験では通用しない」というものだったと思い出します。

もっとも、「それなら、きみは共学部に異動して、実力を試しなさい。」という指示を受けることになるとは、予期していませんでしたが。

3. 共学部を「理数インター」と命名

女子校とは別に、共学の中高一貫の進学校を、同じ敷地の中に創ると覚悟を決めたものの、当時の女子校の進学実績は、表2に示すような状況でした。

進学校なら単年度で実績を表記するのですが、そうでないところが、実情を物語っています。

共学部を創るという認識は、私以外の教員を、すべて学外から採用するということになります。果たして、オリジナルメンバー数名は、今考えても、私以外は、個性派集団でした。この人たちでなければ、「垂直立ち上げ」は、できなかつたと思います。

「理数インター」とは、共学部のコンセプトであり、愛称でもあります。当時の副校長として招聘された方が命名したものです。初めて聞いたとき、良いネーミングだなと思いました。

私は、解釈の自由性の幅が大きい言葉に、可能性を感じます。これは、受験生と保護者にとっても魅力あるワードと思いました。

(表2) 当時の進路実績 (2007年度学校案内より)

大学名	過去3年
早稲田大学	2
明治大学	2
青山学院大学	1
立教大学	2
法政大学	1
中央大学	1

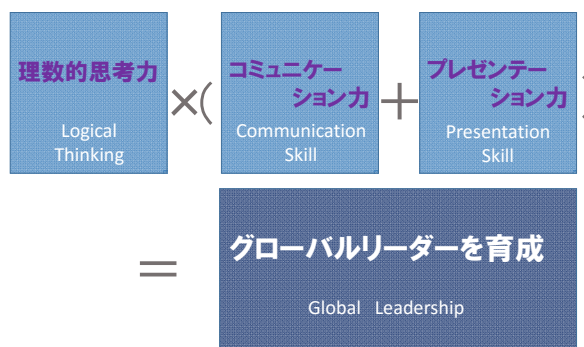
4. 共学部を立ち上げる

「理数インター」とは、理数的思考力に基づくコミュニケーション力・プレゼンテーション力が、21世紀のグローバル・スタンダードであるという認識から命名されたものだと、私は解釈しています(表3)。

進学実績のない学校ですから、期待をかけていただけるすべを付け加えました。それが、この「進学マニフェスト」です。(表4)

マニフェストというと、当時の民主党の言葉でしたね。そちらは、もうなくなっていました。われわれは、この決意が原点です。

(表3) 理数インターコンセプト

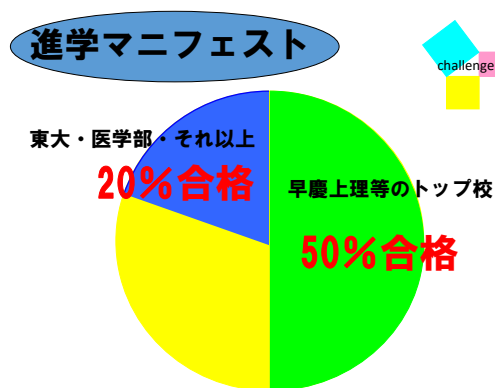


当時の反応は、冷淡でした。塾回りしても、信用してもらえない根拠はありませんでした。われわれには熱意しかなかったのが、実態でした。

ある総合雑誌で、ある教育ライターが、こんなことを公言している学校があるという記事を見ました。はしたない。という良識派の意見だったと思います。

しかし、われわれは評論家ではないので、どんな形でも、話題にしていただけの、ありがたいという心境でもありました。

(表4) 進学マニフェスト



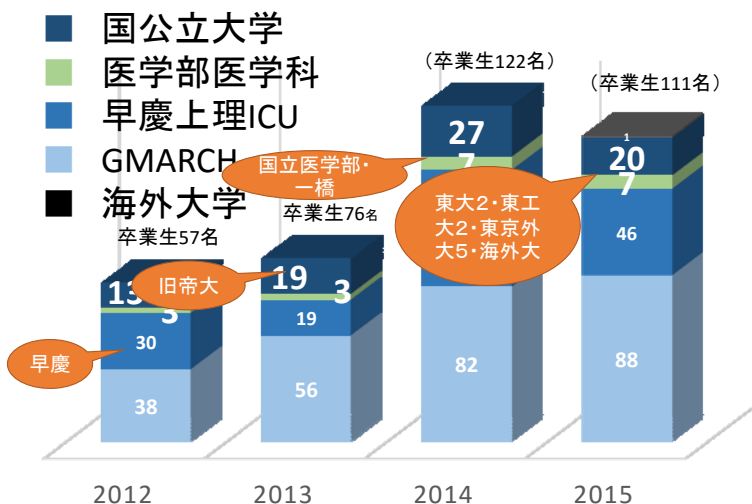
5. これまでの10年

これまでの10年の振り返りは、『私学経営』495号（2016年5月発行）掲載の論文に、率直に書かせていただいたとおりです。

ここでは、進学校としての実績とその評価を、できるだけ客観的に話したいと思います。まず、今春卒業した4期生までの、合格実績です（表5）。

卒業生は、よく健闘してきたと思います。毎年、新しい歴史を創ってきました。進学校というにふさわしい、自己ベストの更新を、文化として定着しつつあると思います。

(表5) 難関大学合格実績4年間の推移



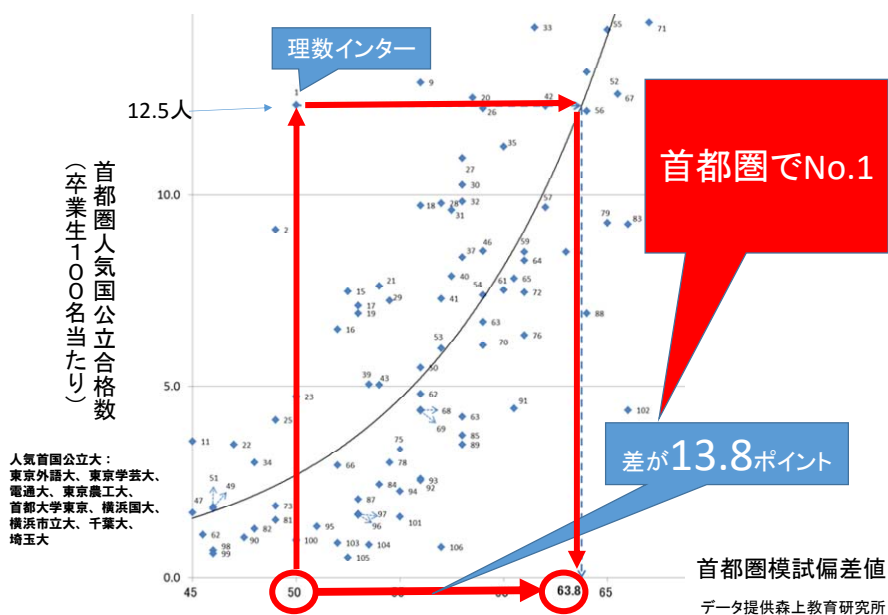
そして、その実績に対して、森上教育研究所が行った分析です（表6・表7）。

ここで得意そうに話すと、それこそ、はしたないので、要点のみ申し上げます。

中学受験では、入学しやすい偏差値の学校だが、大学進学実績では、なかなか見どころのある学校である。という評価をいただいています。

そう評価していただけるのは、ありがたいことです。

（表6）学力を伸ばす学校 No. 1



（表7）学力を伸ばす学校 No. 1



6. 学力を伸ばす学校とは

とはいえ、学力を伸ばすのは、もちろん生徒です。どうしたら、自ら学力を伸ばす生徒になってもらえるかという課題が、すべての教育者の課題です。

10年間の試行錯誤を経て、私が言えることは、3つのポイントです。

① 学校を好きになってもらう動線をつくる

1つ目は、学校を好きになってもらう動線をつくることです。

自己肯定感の高い生徒になってほしいと思います。

そのためには、好きなことを好きなように行い、それに対して納得のいく評価をもらうという経験が必要だと思います。

そこで、創立10周年を期に、中学1年生から新教科「理数インター」を週1時間設置しました。簡単にいえば、宝仙学園流のアクティブ・ラーニングです。1人1台iPadを渡し、グループワークとプレゼンテーションを毎時間行い、互いに傾聴し、互いのよさを認め合い、秀逸な意見やアイデアについて選出し、その理由を言語化してみようという仕掛けです。

次年度には、中学1・2年生。次々年度には、中学全学年で履修します。毎年取り組むことで、テーマ及びプレゼンテーション・スキルの精度を上げ、高校2年生の修学旅行中に行う、スタンフォード大学の英語プレゼンテーションの一層の充実につなぐことも、狙いです。

私から、担当者（教科横断型のチーム・ティーチング）に要請したことは、新入生から、教科「理数インター」が楽しいと言ってもらえるような授業にしてほしいということだけです。

事実、1年生は、予め答えの用意されていない教科「理数インター」に参加することが、学校に来る楽しみの一つになっているようです。

担当者は、カリキュラム及びシラバスは、授業をしながら具体化し、充実させていくというワイガヤ・スタイルで運営しています。

② 中学生には、生活習慣・学習習慣をしっかりと身につけてもらう

2つ目は、中学生には、生活習慣・学習習慣をしっかりと身につけてもらうことです。

本校は、実は、授業時間が週37時間あります。土曜日は4時間。7時間ある平日が週3日。そうしないと、週37時間の時間割は作れません（6時間目で終わる平日2日と土・日が、部活動のできる日ということになります。）。

中学生にとって、学習面の負荷が大きい学校だとは思いますが。

しかし、学校が好きだという中学生になってもらえれば、この負荷に耐え、しっかりした生活習慣・学習習慣を身につけてもらえるように育ってもらえる。と期待しています。

もちろん、鍛えるばかりではなく、時に励まし、時に慰めることも大切です。

③ 高校生には、信頼関係を築くことを通して、コーチングの成果を共有する

3 つ目は、高校生には、信頼関係を築くことを通して、コーチングの成果を共有することです。

思春期後期の高校生が、身近な大人である親と教員に対して懐疑的な姿勢を示すことは、発達段階を考えれば、当然のことです。

好意的な助言さえも相対化する過程。しかも、それをどう表現したらいいかの世知が身につけていない段階。彼ら、彼女らも、戸惑っている最中です。

まさに支援を必要としている発達段階です。その時に、教員は、というか、大人は、いかに向き合うことができるかという問題です。

一般的に言って、人は、誰の言動に耳を貸すのか。誰なら、弱音を吐けるのか。それは、自分の話を聞こうとしてくれる人であり、理解しようとしてくれる人だと思います。

であれば、教員は、というか、大人は、自分がまさにその人であることを理解してもらえるような言動と振る舞いを示せば良いということになります。

コーチングというコミュニケーション・スキルは、データに基づく分析と、そこから導き出せる学習方法の改善点を、生徒本人が決めたという実感を持ってもらうことだと理解しています。

7. これからの10年

私は、校長に就任して2年目です。

校長に就任することが決まると、「あなたは、どんな学校をつくりたいのか」という問いを投げかけられるようになりました。

なるほど、校長とは、この問いに答え続ける仕事なのかと、暢気な私も、気がつきました。

そこで、1ヶ月ほどかけて考えて創った言葉が、「知的で開放的な広場」です。

込めた意味は、「生徒がプレイヤー。教員はコーチ。保護者はサポーター。卒業生は、後輩のために一肌脱いでくれるOBとOG。それぞれが、それぞれの持ち場を通して、学校という広場に貢献する。」というものです。

生徒が主役の学校になるには、生徒自身が当事者意識を持って学校生活を



送ることが前提です。そのためには、例えば学校行事は、生徒自身が企画段階から参画し、主体的に運営し、事後は総括して、後輩に伝統を引き継ぐという一連の行為が必要となります。

こういう行為を通して、積極的な失敗こそが成長につながるという、青春のダイナミズムを、是非経験してほしいと思っています。

こうして、「知的で開放的な広場」を、この学校に集う人たちの合言葉にしようというのが、校長としての所信表明になりました。

それに伴い、「進路指導」と「生徒指導」という言葉を捨て、それぞれ「進路支援」、「生徒支援」に変えました。教育とは、生徒の自立を支援する営為であるという認識を、闡明にするためです。

8. 進学校としてのこれからの10年

教育の原点を考え、それを具体的な生徒との関わりに生かしていこうという試行錯誤は、結果として、これまで以上の進学実績に結びつくはずだと、確信しています。

したがって、立ち上げ当時は、荒唐無稽と思われた「進学マニフェスト」は、今後も掲げ続けていきたいと思っています。人は、目標以上の成果を出すことはできないからです。

ただし、目標に至る方法についての考察は、10年前より具体的で粘り強くなったと考えています。

2020年度からスタートする大学入試改革は、思考力・記述力・構成力（編集力）を問う方向で進められると言えそうです。この改革にどのように対応するのかと、最近、しばしば問われるようになりました。

私は、今こそ、本校のコンセプトである「理数インター」を実践することだと答えています。コンセプトは、普段使いしてこそ、言葉に命が宿るものです。

先に触れた宝仙学園流のアクティブ・ラーニングである新教科「理数インター」をはじめ、理数的思考力に基づくコミュニケーション力・プレゼンテーション力の育成を、学校生活のあらゆる場面で試行したいと考えています。

そして、大学入試改革と教育課程改革のみならず、中学入試改革も、連動すると考えるべきだと思います。

英語の4技能ということが、よく言われますが、そもそも日本語において、中学入試の世界において、従来どんな取り扱いをしてきたのか。

「読む」、「書く」、「聞く」、「話す」のうち、はじめの2つは問われてきたが、残りの2つは試されてこなかった、という事実があります。

それならば、「聞く」力と「話す」力を問う中学入試を行うことで、思考力・表現力・構成力（編集力）を問うという試みを、昨年度入試から始めました。

「聞く」力は、「日本語リスニング」で問い、「話す」力は、「学習歴のプレゼンテーション」で問うという入試です。

私たちは、この入試方法を、「リベラルアーツ入試」と名づけました（この入試方法については、詳しくは、本校のHPからご覧ください。）。

そしてさらに、今年度からは、「学習歴のプレゼンテーション」を、日本語または英語で行うというオプションも設けます。

中学入試改革と教育課程改革で、変わる大学入試に対応しようと考えていますが、本校の場合、あくまでも、コンセプト「理数インター」を実践するという糸で、すべてを紡いでいこうと考えています。

おわりに

最初に申し上げたように、私の経験と教育観は、聞き手（読者）のみなさんとの対話を通して、深めていければ、ありがたいと思います。

ご質問やご意見があれば、是非、お尋ねいただきたいと思っています。同じ私学人として、闊達な意見交換や交流の機会が訪れることを期待しています。

〔 本稿は、平成28年7月定例セミナー「事例に学ぶ私立中・高校の成長戦略」において、講師がご講演された内容を書き下ろしていただいたものです。 〕